

県営は場整備事業（昭和47年度）

埋蔵文化財緊急発掘調査

古町・田中北遺跡

—緊急発掘調査報告—

1973

長野県上伊那郡官田村教育委員会

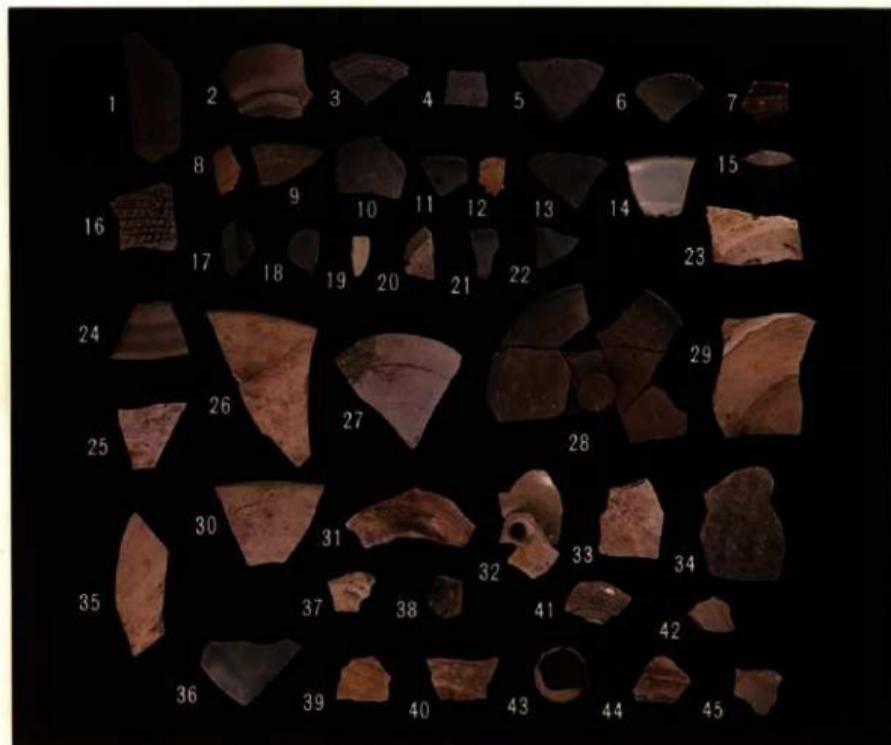
古町・田中北遺跡緊急発掘調査報告

県営ほ場整備事業

昭和47年度分

1973

長野県上伊那郡宮田村教育委員会



古町及び田中北遺跡出土遺物

- ・中国龍泉 36(青磁碗) ・常滑 34(カメ)
- ・古瀬戸 7(鉄釉) 15, 43(天目茶碗) 16, 39(灰釉) 23, 40, 45(灰釉平碗)
27(灰釉印花文瓶子) 29(灰釉深皿) 32(灰釉高环)
41(灰釉印花文小壺)
- ・中津川 10, 24, 25, 26, 30, 31, 33, 35, 44(大平鉢)
- ・美濃 37(灰釉皿) 38(鉄釉の碗)
- ・須恵器 2-6, 8-14, 17-22, 28 ・カマ不明 1, 42(灰釉)

序

昭和43年と昭和44年に中越遺跡の発掘調査をしましたが、その出土した膨大な資料は、考古学界に一つのエポックをもたらしました。

しかし、その中越文化圏がどのような広がりをもっているか解明されず、今後興味ある問題となっていました。

その後、幸い中央道の建設に伴う遺跡の調査があり、発見されたそれらの資料により、縄文早期末から歴史時代にいたるまでのある程度の解釈は得られましたが、さらに東山道宮田駅址・鎌倉街道・春日街道に関する資料を得たいと思っていました。

たまたま、本村の開発事業として、は場整備事業が行なわれることになり、当該地区内の埋蔵文化財を調査する必要に迫られました。

古町・田中北遺跡は、この地区内の遺跡であり、南信土地改良事務所の委託をうけ、本村が行なったものであります。

この調査を行なうにあたり、調査団を設置し、またとない機会を逸せず資料の収集に努力しました。関係者各位のご協力により、古代史の諸問題に対してある種の示唆が得られたことは、よろこびにたえません。

ここに、報告書を作成し、大方諸賢のご教示をおねがいすると同時に、ご協力の各位に感謝を捧げるものであります。

昭和48年3月

宮田村教育委員会

教育長 細田義徳

例　　言

1. 今回の調査は県営ほ場整備事業に伴う、第1次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、ほ場整備に伴う緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和47年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略し、資料の再検討は、後日の機にゆずることとした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を明記した。

友野良一・細田徳登・山田徳登・太田 保・上川名 昭・向山雅重・吉村 進・田中義哉
図版製作者、遺構及び地形、地質実測、山田とし、上川名 昭、友野良一
土器・石器・山田とし、友野良一・吉村 進
写真撮影者、発掘及び遺構、友野良一・細田徳登・吉村 進・山田とし・細田徳登
遺物、太田 保・友野良一
5. 本報告書の編集は主として、宮田村教育委員会があたった。

目 次

序

例 言

目 次

挿 図 目 次

図 版 目 次

第Ⅰ章 遺跡の環境	1
第1節 位 置	1
第2節 地 形	2
第3節 地 質	4
第4節 歴史的環境	5
第Ⅱ章 発掘調査の経過	11
第1節 発掘調査の動機といきさつ	11
第2節 調査の組織	11
第3節 発掘作業経過	12
第Ⅲ章 遺 構	16
第1節 1) 田中北第1号址	16
2) 田中北第2号址	16
3) 田中北第3号址	18
4) 田中北第4号址	18
5) 田中北柱穴址	18
第2節 1) 古町第1号住居址	19
2) 古町A地区の調査	21
3) 古町B地区グリッド	22
第Ⅳ章 遺 物	24
第1節 田中北遺跡の遺物	24
第2節 古町遺跡の遺物	24
第V章 ま と め	25

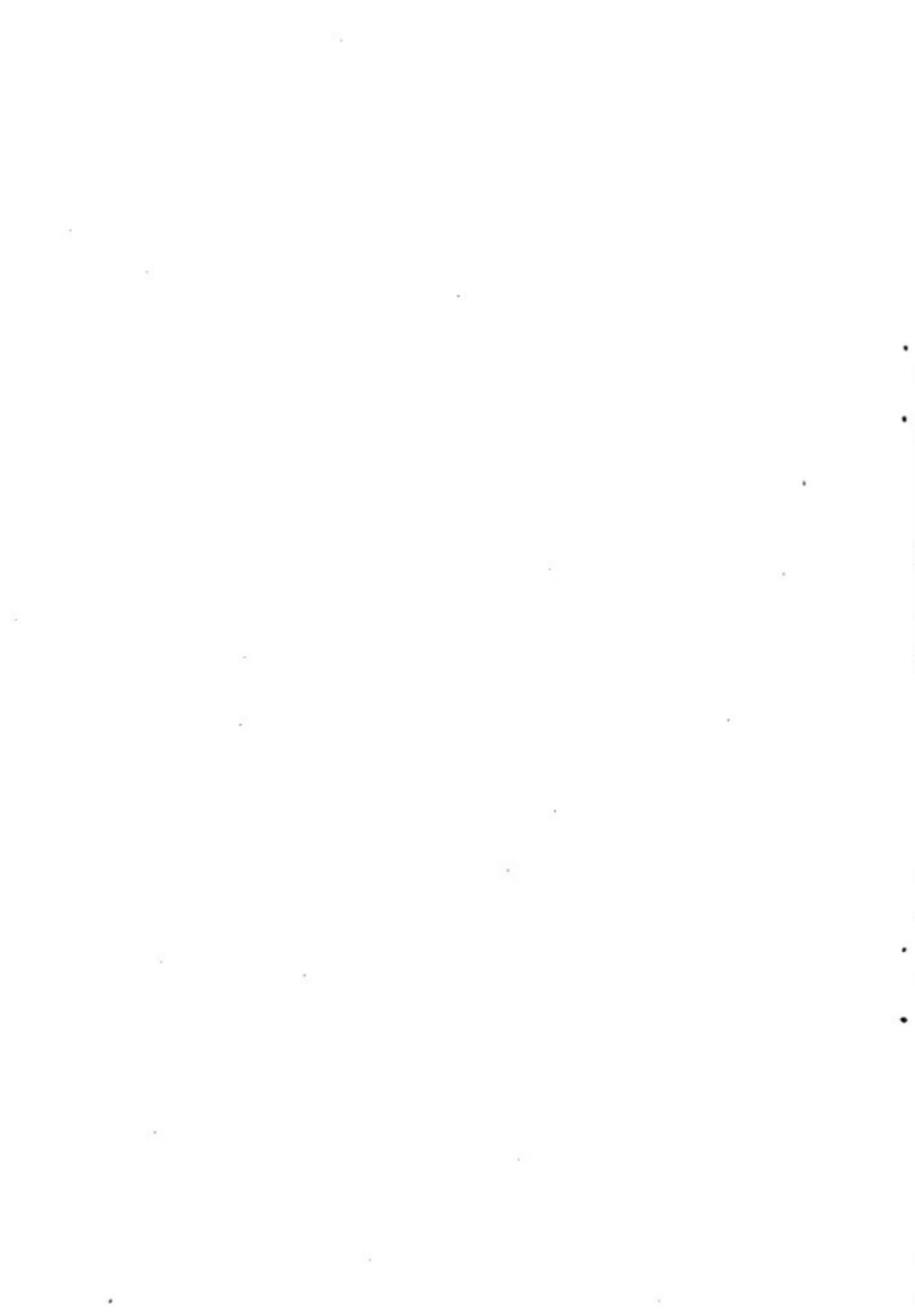
挿図目次

〔図種〕	〔番号〕	題名	〔位置〕	〔表示資料〕
口絵		出土遺物		
挿図	第1図	遺跡分布図		宮田村内遺跡分布図
	第2図	地形図		古町、田中北遺跡
	第3図	地層調査		田中北遺跡
	第4図	地質調査		田中北遺跡
	第5図	地質調査	上	古町遺跡第1号住居址東断面図
			下	田中北遺跡東西の縦断面図
	第6図	地質調査		古町遺跡南北排水路縦断面図
	第7図	発掘状況		田中北遺跡
	第8図	発掘状況		古町遺跡
	第9図	発掘状況		星休み風景
	第10図	遺構配置図		田中北遺跡
	第11図	遺構図		田中北遺跡第1号址実測図
	第12図	遺構図		田中北遺跡第2号址実測図
	第13図	遺構図		田中北遺跡柱穴址
	第14図	遺物実測図		田中北遺跡遺物実測図
	第15図	地形図及び遺構分布図		古町遺跡
	第16図	遺構		古町遺跡第1号住居址
	第17図	遺物実測図		古町遺跡第1号住居址出土
	第18図	遺物実測図		古町遺跡B地区グリッド出土
	第19図	遺構実測図		古町B地区グリッド
	第20図	遺物実測図		田中北遺跡出土石器

版図目次

〔番号〕	〔題名〕	〔位置〕	〔表示資料〕
第1	遺跡全景		古町、田中北、木戸口
第2	地層図		古町遺跡第1号住居址東断面図
第3	遺構		古町遺跡第1号住居址
第4	遺構配置図		田中北遺跡
第5	遺構		田中北遺跡第1号址
第6	遺構		田中北遺跡第2号址
第7	遺構		田中北遺跡柱穴址
第8	トレンチ		田中北遺跡
第9	遺構		田中北遺跡第2号址

〔番号〕	〔題 目〕	〔位置〕	〔表示資料〕
第10	遺 槍		田中北遺跡柱穴址
第11	遺 物		田中北遺跡遺跡出土
第12	遺 物		田中北遺跡第3トレンチ出土土器
第13	仏 跋		全昌寺（鎌倉仏）





第1図 宮田村内遺跡分布図

- 1. 北の城址
- 2. 中越城址
- 3. 狐塚
- 4. 西垣外
- 5. 逸ヶ原
- 6. 中原
- 7. 西原
- 8. 中越
- 9. 作道
- 11. 安岡
- 12. 天白古墳
- 13. 伏戸
- 14. 真米
- 15. 田中北
- 17. 円通寺
- 18. 元宮東
- 19. 宮の沢
- 20. 広垣外
- 21. 城山
- 22. 古ル城
- 23. 西明寺址
- 24. 木戸六
- 25. 駅遊堂
- 26. 米山A
- 27. 姫宮
- 28. 島林古墳群
- 29. 三つ塚下
- 30. 三つ塚古墳群
- 31. 三つ塚中
- 32. 三つ塚上
- 33. 五升荷
- 35. 松戸
- 36. 熊野寺
- 37. 高河原
- 38. 二つや
- 39. 稚児塚
- 41. 上の宮
- 42. 駒つぶれ
- 43. 新田丸山
- 44. 一本松
- 45. 田中西
- 46. 古町
- 47. 古町南
- 48. 木戸口
- 49. 大沢端
- 50. 柏木
- 51. 倉骨
- 52. 下の段
- 53. 中越北

第1章 遺跡の環境

第1節 位置

古町・田中北の両遺跡は、長野県上伊那郡宮田村大字北割に所在する。

木曾山脈（「中央アルプス」ともいう。）の主峠、西駒ヶ岳の東麓、標高650～670mの間に分布する遺跡で、ともに大沢川と堂沢川に挟まれた長坂扇状地に展開し、すぐ北部は伊那市西春近字諏訪形と接している。

〔規模〕

- (1) 古町遺跡は、西端は諏訪形井に添い、東西 60m、南北 200m にわたる間に存在している。
(2) 田中北遺跡は、田中段丘の北部にあたり、広さは、おおむね東西 100m、南北 150m である。

〔国鉄からの距離〕

飯田線宮田駅から村道北割線を経路として西北へ、田中北遺跡まで 500m 古町遺跡へ 970m の距離にある。

第2節 地 形

〔伊那盆地の概観〕

上伊那の平坦部、すなわち、伊那盆地は、南北に連なる木曽山脈と赤石山脈（前山に「伊那山脈」をもつ。）の間に位置し、その基底を諏訪湖に源を発した天竜川が両山脈から流れ出る多くの支流を合わせて南下している。

東西の標高 2,000~3,000m 級の連山は、険しさのゆえに渓流たぎり落ち、激しい流出率をもって盆地底の田野を開削する、いわゆる伊那谷特有の田切地形は、天竜川の浸食活動と相まって、隨處に複合扇状地、河岸段丘、沖積地を形づくっているのである。

盆地の東西幅は、伊那市・旧伊那町付近が最も広く 15km に及ぶが、同市表木付近では 2.5km にせばまり、本村と駒ヶ根市との境へ来て 8km に広がる。

駒ヶ根市を南下すると、天竜川の段丘は一層複雑化し、標高差が著しく、支流河川の浸食も多い傾向を示している。

盆地は、おおむね天竜礫層の上に火山灰土層を堆積した土質で形づくられている。

〔大田切扇状地〕

遺跡付近の地形を論ずるためにには、大田切扇状地を前提としないわけにはいかない。

本村は、東西 11km、南北 3.8km で、面積約 70 パーセントが山地である。

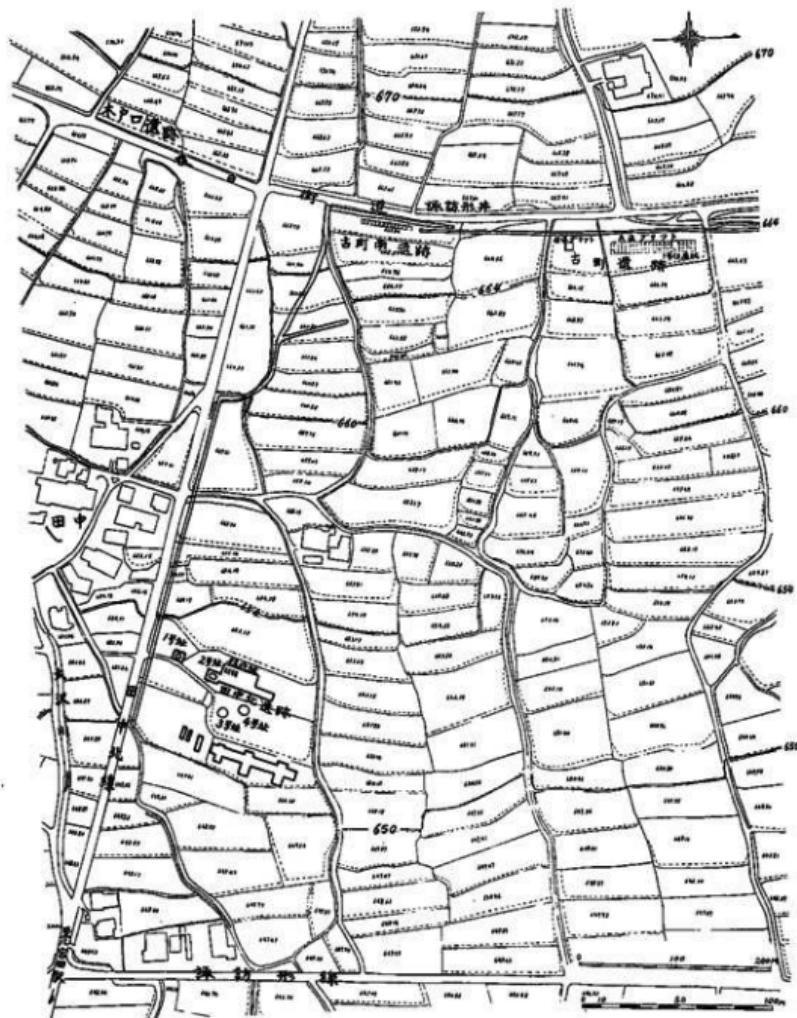
西駒ヶ岳（2,956m）に源を発した大田切川は、本村と駒ヶ根市との間を流れ、最大洪水時 764 立方 m 平均勾配 4.4 パーセントの河川である。

この川の形成した大田切扇状地は、本村ならびに伊那市南部（諏訪形・赤木・下牧）と駒ヶ根市赤龍の約 70 パーセントに及び、総面積 52 平方 km といわれている。

試みに、本村の灌漑用水源たる西山から発する河川は、前記、大田切川、黒川と桐の木沢、寺沢川、押手沢川、城の沢、宮の沢、長坂川、真米の沢、堂沢川等で、平坦部へ来て、丸山井、大田切井、大久保井、小田切川、大沢川、桜戸井、諏訪形井、堂沢川に成長して天竜川へそそぐのであるが、これらの河川の形成した扇状地の基盤は大田切扇状地であることは言うまでもない。

西山山麓の浸食は常に進み、大田切扇状地の上に過剰堆積されたのが寺沢・押手沢・城の沢（源が洞）、宮の沢、長坂の各扇状地である。

本村における古代集落は、これらの扇状地にも発達したことが明らかにされているが、くわしくは第4節歴史的環境へゆずることにする。



第2図 古町・田中北地形図

〔調査地周辺の地形と特質〕

湿地帯 本村西山山麓の地形の特質は、平地から急に山麓になることである。

これは、激しい断層によって生じた現象で、山麓に接して湧水が多い。いまでは、暗渠排水等が進

み、「沼」「大沼」等の地名が名残りをとどめるのみとなったが、新田から南割へ通ずるスクモ地帯、北割の沖の芝原を中心として、柏木南、田中、南割実庵、姫宮北にかけての一大湿地帯が存在したのである。

全村的な湿地帯の広さは、およそ 54 ヘクタールに及んだと見るが、弥生前期にはじまった原始稻作には絶好の場所であり、東山道駅田としての要件も自然に備わっていたものといえる。

なお、弥生式以降の農耕集落は、この低湿地をとりまいて発達したのである。

井 節 桜戸井は、南割の「桑の木田上」の坂の「登り口」付近から大沢川を分流したもので、米山、柳切、沖の芝原、柏木東、殿村までの諏訪形井の上段を灌漑している。諏訪形井は第4節へ精説。

長坂扇状地 本遺跡に直接関係する扇状地で、延長 1.5km、扇状地面積 88.5 ヘクタール、山地勾配平均 30 度、元宮神社北は 10 度。扇状地勾配は諏訪形井上流で 4 度、諏訪形井下流で 3 度 30 分の 3 段階にわたる扇状地である。

この扇状地に展開された文化は、中央道の埋蔵文化財の調査により、縄文早期末葉～前期、中期初頭、中期、晚期、古墳時代の各期にわたって分布されていたことが明らかにされた。(友野良一・田中義藏)

第3節 地 質

〔総 説〕

大田切扇状地は、本村側では東北に 2.5~4.5 パーセントの勾配で傾斜している。田中段丘は、その間を標高差 7~13m をもって形成しているのである。

また、隣接の駒ヶ根市では赤穂地区の上穂沢川を境に中田切扇状地と接している、その総面積は 52 平方 km に及び、竜西最大の扇状地といえる。

その地質は、細粒両雲母花崗岩・縞状片麻岩・片状ホルンヘルスⅡ・斑状花崗閃綠岩・中粒花崗閃綠岩等を基盤としている。

本遺跡の地質は、この大田切扇状地に長坂扇状地が過剰堆積してつくられたものである。

〔遺跡付近の地質のなりたち〕

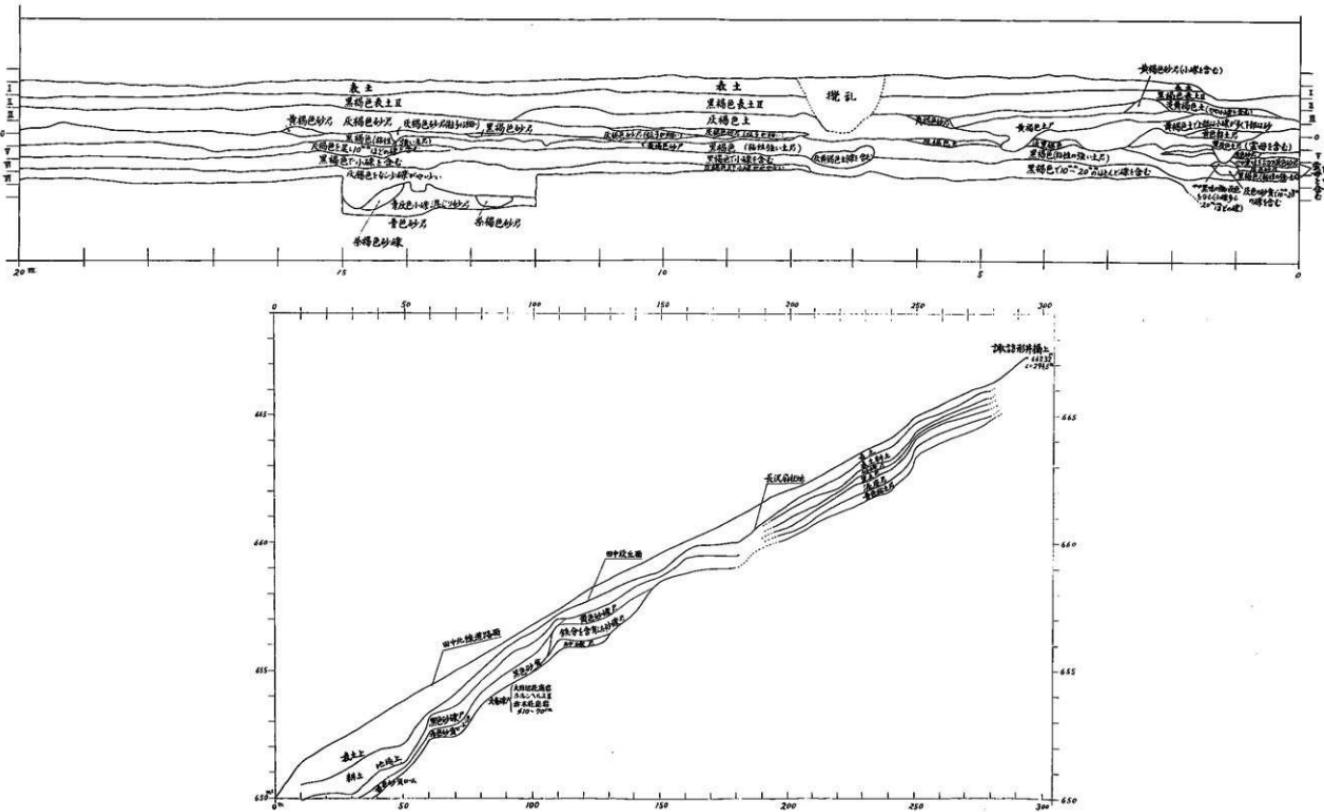
遺跡周辺の地層図は、第5図に示すとおり、長坂扇状地が田中段丘下限を基として、大田切扇状地層の上に約 7 パーセントの傾斜をもって過剰堆積している。



第3図 田中北遺跡地層

この長坂扇状地は、一見なだらかなタイプと見受けられるが、実はそれとは逆に非常に起伏の激しい地形である。ここにある川筋は現在では、柏木小路を経て南に流れる川と真米から古町にいたる 2 つの河川しか認められないが、古くは洪水のある度に変化して幾筋かをつくりていたのである。

明治末年頃までは、川筋の中間に沼や池(ドブ)が点在し、「タニシ」や「魚」をとったことがあると古者が話してくれた。地層図をみると、よく理解



第5図 上 古町遺跡第1号住居址東西断面図
下 田中北遺跡東西の縦断面図

できることである。それだけに、この沼地を通行することは、ある程度制約があったであろうと考えられる。

この扇状地を縱断面図でみると、平均傾斜角度は7パーセントで上層耕土50cm、砂礫層20~25cm、黒色層3cm、泥炭層30cm、青色粘土層30~40cmで、その下底は、この扇状地の基盤をなしている30~60mm角の角礫層の堆積が続いている。それ以下は調査できなかったのは残念である。

〔田中北遺跡付近の地層〕

この長坂扇状地は、田中北の段丘下で大田切扇状地に連していることは既に述べたが、扇状地の末端では、古町でみられた角礫層とは異なり、小砂礫層に変化している。

〔古町遺跡付近の地層〕

古町中心部から村道北割線交差点まで約270mに亘り、この断面を調査したところ、その間の高低差は3mあり、中ほど古町起点100~150mの間は凹地で、前述の沼地帯を言い、古くは長坂の流れがあり、開田により埋め立てられたものである。なお、第6図の北端は、堂沢川の浸食により極端に低くなっている。

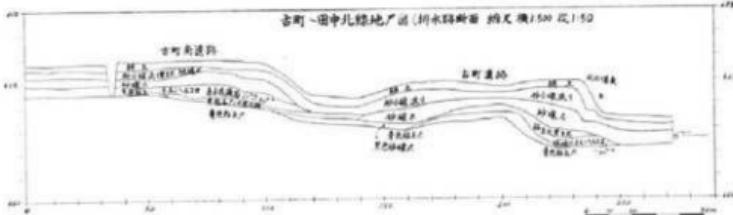
この断面の地層は、上部から表土I 18cm、黒褐色表土II 30cm、灰褐色土25cmで、灰褐色砂礫は粒子が細かい。黒褐色土層(粘性が強い)15cm、青色粘土層平均25~30cm、以下は20~70mm角の角礫層であった。湧水は青色粘土の上層からである。

遺物包含層は、黒褐色表土II層の下部までである。本断面に認められた岩質は、ホルンヘルスⅡ、赤木花崗岩、綿状片麻岩を主体とする砂礫層により構成されている。

(友野良一)



第4図 田中北遺跡地質



第6図 古町遺跡南北排水路断面図

第4節 歴史的環境

第1 まえがき

宮田村において、いま判明している遺跡は54カ所に及び、原始時代に属するものが多い。

これらの先住文化に恵まれた立地条件は、後に東山道宮田駅の開設にもつながるのであるが、今回調査の対象となった田中北・古町遺跡を知る上で、きわめて関連があるので、まず、村の平坦部のはば全域にわたる遺跡の概観にふれてみたい。

第2 遺跡の地域的分布

本村の遺跡の分布は、第1図に示すとおりである。すなわち、

- (1) 西山山麓地帯 (丸山・上の宮・駒つぶれ・二つや・高河原・熊野寺・松戸・米山A・駅迎堂・木戸六・宮の沢・広垣外・元宮東・円通寺・真米・天白)
- (2) 陳跡形并添い (観音寺・倉骨・木戸口・上横田・仏供免 古町)
- (3) 田中一帯 (田中・田中北)
- (4) 姫宮周辺 (実庵温田地帯)
- (5) 駒ヶ原 (三つ塚・滝ヶ原)
- (6) 中越 (中越・西ヶ原)
- (7) 大久保 (大久保・大久保北)

に大別される。もとより、これは地理的分類にすぎない。自然条件とくに大小河川の流域の変遷が先住文化にどのような波及をもたらしたか、あるいは地層的な研究は、未発見のものをも含めて、今後も期待される課題である。

第3 おもな遺跡の概要

(1) 西山山麓地帯

ア. 上の宮・駒つぶれ・高河原遺跡

寺沢川の扇状地に分布しており、高河原は縄文中期、上の宮、駒つぶれはいずれも古墳時代の遺跡と推定される。

高河原は、中央道建設に伴う埋蔵文化財の調査（以下、「中央道調査」と略記する。）の結果、地下2.5mの層から縄文中期後葉の住居址4と埋カメ3個や石器及び土器の破片多数が発見された。寺沢扇状地を基盤とする大集落が存在したことが考えられる。

イ. 熊野寺・松戸遺跡

寺沢川と押手沢川の複合扇状地である。この地域からは灰釉陶器片と土師器片が出土している。大規模と思われる熊野寺の遺構は、今後中央道調査により明らかにされるので詳しくは譲り受けられる。

ウ. 米山A・駅迎堂・木戸六遺跡

押手沢の扇状地には米山A、城の沢扇状地には駅迎堂・木戸六遺跡がある。

駅迎堂遺跡は、昔、黒曜石が出土、中央道調査により天目茶碗の破片が発見されている。

この付近は、大塔合壁（応永7年・1400年）、結城陣番帳（永享12年・1440年）に見える宮田氏の居館があったものと推定され、上方に城山がある。

エ. 宮の沢遺跡

縄文中期後葉の住居址と平安時代の堅穴が発見され、遺跡の西方からは、山茶碗・灰釉陶器

破片・鎌倉時代の四耳壺の破片が出土している。

オ. 元宮東遺跡

宮の沢、長坂川に挟まれた、いわゆる北割扇状地で縄文中期の遺跡が主体をなすが、中央道調査の昭和46年11月25日、この遺跡の一部の層序から縄文早期末葉の住居址が偶然に発見された。県内では北安曇郡林頭遺跡に次ぎ全国的にも数少ない資料に属する。中越遺跡の前段に相当するものとして注目されている。

カ. 円通寺遺跡

中央道調査により、灰釉を伴う2つの住居址と平安時代の柱穴址が発見された。隣接の元宮東遺跡でも平安時代の柱穴址が発見されている。なお、円通庵寺は江戸期末に焼失している。

キ. 真米遺跡

真米の沢扇状地で、円通寺遺跡の東南約100mに位置する。縄文後期から晩期へかけての遺跡である。

ク. 天白古墳

長坂川と真米の沢により形成された複合扇状地に所在したが、中央道のルートになったので発掘したものである。古墳時代としては終末に近い7世紀後半から8世紀にかけての古墳で、追葬が行なわれた形跡がある。横穴式石室で、人骨のはか、副葬品の馬具・直刀・金環・玉類・鉄鎌・刀子・須恵器・土師器が出土した。

東山道文化との関係や三つ塚古墳とならび豪族の消息について興味深く考えられる。

ケ. 広垣外遺跡

宮の沢扇状地にあり、古墳時代以降の集落と推定され、鬼高式に属する土師器の出土が見られる。

(2) 謙訪形井に添う遺跡

観音寺・倉骨・木戸口・上横田・仏供免・古町遺跡があり、いずれも延喜式に見られる東山道宮田駅に関係ある遺跡と思われる。古町周辺は、一面の水田地帯であるが、鎌倉街道・春日街道の通過地点との説が有力である。

とりわけ、木戸口は宮田駅址の一部として上・下伊那郡史に比定されており、上横田は、弥生に始まる古代水田址として、観音寺は、弥生後期・土師式の遺跡であるとともに平安初期の遺跡でもあると推定される。

古町は、今回の調査となつたが、他の地籍は、は場整備事業に伴い順次、調査が進められる予定である。

(3) 田中・田中北遺跡

町部の西、田中の段丘を上下に、南の一本松から北の伊那市謙訪形境にまたがる広大な遺跡であり、田中北遺跡は今回の調査の対象となつた地域である。

(4) 姫宮周辺の遺跡

姫宮を中心として、実庵にかけて縄文早期・中期・弥生後期・土師式の大集落が小田切川左岸上

と大沢川との漫田地帯を挟んで分布している。

(5) 駒ヶ原の遺跡

大田切川と小田切川に挟まれた典型的な段丘地である。西の丸山、東の滝ヶ原を結ぶ一連の遺跡は庄巻というにはかではない。

現在の三つ塚古墳群を中心として、東西1kmにわたる地域からは、縄文中期前葉から末葉にいたる間の勝坂式・加曾利E式という全型式が出土しており、一大集落址を想定するが、大正2年から始めた駒ヶ原土地改良事業のため壊滅したのは惜しむべきことである。

東端の滝ヶ原は、三つ塚と同様の集落址と目されている。

(6) 三つ塚・鳥林古墳

古墳時代の遺跡である。

三つ塚の内部は、粘土床をもってし、西塚からは人骨・鹿角装の刀子・鉄鎌が出土、東塚からは主体部は未発見であるが直刀・管玉・須恵器大カヌ・高环・馬具等が出土している。須恵器の形態は最終末を下らないものである。

鳥林にも3基の古墳があったが、うち2基は破壊され1基を残すのみとなった。出土品から類推して三つ塚古墳より古いものと思われる。

なお、南割に塚田という地名が残っているが、塚を見た人がないということで、その由来は明らかではない。

(7) 中越・西ヶ原遺跡

縄文早期から前期にわたる遺跡である。中越遺跡は、全国的に著名であることはいうまでもないが、昭和44年と45年の調査では、方形及び円形の住居址52が発見され、大集落址であることを立証した。

昭和45年12月2日、長野県考古学会により「中越遺跡をめぐる諸問題」について広くシンポジウムが開かれたことを付記したい。

東方には、西ヶ原遺跡が接続している。

(太田 保)

第4 井 筋

諏訪形井（横井・横掲げ井）

大沢川から、南割の俗称郷倉のところから、流れをわけて、北へ井堰をひき、諏訪形（現・伊那市西春近諏訪形）にいたるもの、諏訪形井、または横井・横掲げ井などと呼んでいる。

この諏訪形井について、諏訪形の「大橋家」酒井今朝松（81）氏の談——享保年中（1716～1736）に、大田切川が大あれして、ヒゲスリ岩に本瀬がうちつけたほどであった。その後、丸山井を使ったが、大あれで荒れた黒川井の復旧工事をするとともに、この黒川井の水の流れてくる大沢川から、横井をあげることを高遠藩へ申請して、そのことが実現した（詳細な工事の記録がある由、未見）。この時、宮田北割村に、一緒に開さくをと頼んだが、「沼地が多く、出水だけでたくさん」だということでの賛成を得られなかった。それで、大沢川から分れるフタマタ（二股）ふつうに郷倉といっている

所から、横に北へ向いて井をあげ諫訪形村にいたっている井堰は、諫訪形の専用井となって、これを「諫訪形井」とよび、横井・横揚げ井ともいい、諫訪形の者は、黒川井と言ったこともある。この横井は郡倉からあとは諫訪形で修理をし、水あげをしてきた。北割の人たちは、横井の水を使わず、上から出た水はトヨで横井を越して使っていたのは私の子供の頃であったが、後、開墾が進んで、水が多く必要になってくると、こっそりと横井の水をとて使っていた。しかし、それだからといって、井ざらい人足はあてなかった。それで、水不足の時、片はしから外しても小言は出なかった。

その後、北割と諫訪形とよく話し合い、人足も、井水も共同して、仲よく使うことになって問題は解消した。昭和35年、さらに、この申合せ書をこしらえて、水利組合長が保管している。(昭和47年8月29日談)

桜戸井(さくらんど井)——宮田村北割「山際」家、太田利雄氏談——宝暦(1751—1764)の頃の文書に、さくらんど井のことが出ている。これは、南割の屋号「北垣外」小田切家の北のところで、大沢川から横にあげ、山から出てくる十貫水・城の沢・宮の沢を横ぎり、長坂の水をトヨで越して、駿村にいたっている井がこれである。(昭和47年8月30日談)——沼地の出水や、山沢の水だけでは足りなくて、諫訪形井より、さらに上に、この、このさくらんど井をひいたことは、水田の開発が順次進んでいったことを語っているものである。

(向山雅重)

第5 東山道宮田駅址

〔序説〕

大和の朝廷が律令国家に成長し、その機能を發揮するためには、中央の指令の徹底と地方の情勢の把握、国の財政の基礎になる調庸物を運ぶ交通通信の整備が絶対的に必要であったことは説明を要しない。

そのため、あらゆる点を磨きにならった。駅伝制も大陸国家が研究して来た制度で、殆んどそのまま採用したのが、京都を中心とした五畿七道と言われるもので、中心地から漸次拡大していったと考えられる。

〔東山道のありさま〕

七つの官道中、最も長いのが東山道(「アズマノヤマミチ」)といわれる。

近江の瀬田から美濃・信濃・上野・下野・陸奥・出羽に通ずる官道で、この困難な長い道も、和銅5年(721年)9月には出羽の國が置かれたというから案外早く開通していた。

これは、大和の朝廷が東北の開拓と、蝦夷対策に全力をそいでいた証拠で、駅路も中路として、山陽道に次ぐ規模をもたせていた。後には東海道が重要になってきたが、始めは東海道の渡河舟行の不便から、専ら東山道を用いて、武藏の国へは支線を出していった。

大宝令(大宝元年・701年)が発布されてからおよそ270年後の天祐年間(970~972年)になると、東海道通行の許可を願い出ているから、それまでは山道の東山道を官道として使っていたことがわかる。

駅(「ウマヤ」)は、原則として30里(約5里)毎に1駅ずつ置かれ、規定の馬と駕子を置き、駅

の経営のためには普通駅（馬10匹）では駅田3町歩を与えられていた。

【宮田駅を考える】

延喜式に記されている伊那の駅名中に育良・堅錦・宮田・深沢の名が見える。宮田駅は現在の宮田の地をあてて差支えないと考える。

東山道は中路にあたり駅に10匹の馬をあてられていた。従って、宮田にも馬10匹、駅田3町歩を与えられていたわけである。

宮田駅に関しては、以前から諸説がなされているが、資料不足のため決定的な判断はむずかしいので、他の例を見ながら類推するほかない。

美濃の坂本駅は、神坂峠の西麓にあり、74里（12里位い）の峠を越えて阿智駅に連絡するために特別に馬30匹をあてられていた。それに対して駅子は215人であったというから、その割でいくと宮田の10匹は、駅子70人ぐらいと考えられる。

駅子を宛てられる家は戸戸でなく、中戸から男子を徵集したというから、1戸2~3人ずつ出すると、中戸が30戸前後あったとして、下戸が何割かあったとすれば50戸かそれ以上の村があったと考えられる。

駅の勤務は非常に苦労があったようで、駅子が逃亡したり、租調の免除をしても公用以外の者が駅馬を利用するなど問題は絶えずあった。

当時の経済は、米中心の経済であったから宮田のような古代から水田が開け、駅田も十分にとれて、まだ余裕のあるところでは、他の所よりも運営にゆとりがあったろうと想像する。

【駅址をウラづける文化的環境】

駅は絶えず人馬の集合がある駅舎が必要であると同時に、馬のための飼料場・保管場・水呑場が必要だから、それ相当の広場が必要であろう。それらを満たす要件は十分そなわっている。

源が洞・宮の沢・長坂扇状地の扇頭の一帯には、鎌倉期の古社寺が並んでいるさまは、当代文化の伝達の姿を示している。

昭和45年、中央道埋蔵文化財の調査にて発掘された天白古墳は、古墳時代最末期のものであり、それとあわせて柱穴跡も発見された。

また、沖の芝原水田地帯の南に「屯の倉」の地名が残っているあたり、古墳と水田倉庫の関係など興味深いことがらである。

そのほか、馬込小路（現在は「真米」の字を常用）、柏木（「カシヤギ」=「吹ぎ」の意か）小路等の地名は、宮田駅址と関係が深い地名として、無下には捨てがたいものである。

その他にも宮田駅址として考えられる所も多いと思われる所以、今回の調査を機会に、広い視野に立って研究を進めたい。

この調査にあたり、諸般の資料を与えて下さった諸賢に感謝し、ご教示を得たいと思う次第である。

（篠田徳登）

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の動機といきさつ

本村のは場整備事業は、全地域を対象に、かねてから構想を練り、各地区においても研究が進められてきたが、最初に施工したのは大久保の53ヘクタールで、昭和44年と45年の2年にわたり、団体営として行なわれたのであった。

昭和45年に樹立した総合開発計画は、重要施策の一環として、残る531ヘクタールを県営により、数年間の継続事業で実施することを決め、昭和46年、まず、中越地区から着手したのである。

いうまでもなく、工事地区には埋蔵文化財が多数点在しており、30アール平均に生れ変わるは場は、同時に遺構その他に歴史的な打撃を与えることを意味していた。

このことは、村民感情としても無視できる筈ではなく、村教育委員会ならびに文化財保護委員会は、計画の当初から数次にわたる会合をもち、その保護対策に苦慮してきたのであった。

あたかも、文化財を埋蔵する北側地区を施工する時期が迫ったので、県教育委員会にその旨を連絡して緊急発掘調査による記録保存の指示を得、かつ、南信土地改良事務所と村との間に調査に関する委託契約が成立するところとなったのである。

そして、南信土地改良事務所はもとより、関係者各位のご協力のもとに、実務は村教育委員会が担当して行なうことになったのである。

(田中義蔵)

第2節 調査の組織

古町・田中北遺跡緊急発掘調査委員会

委員長	向山雅重	(宮田村教育委員会委員長)
副委員長	平沢一男	(旧・宮田村文化財保護委員長)
委員	宮木芳弥	(宮田村教育委員)
	小木曾清	"
	新谷和美	"
	横田徳登	(新・宮田村文化財保護委員長)
	田中義蔵	(宮田村文化財保護委員)
	平沢茂	"
	友野良一	"
	太田保	"
	小田切良彦	"
	細田峠徳	(宮田村教育長)

古町・田中北遺跡緊急発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学協会員
副団長	太田 保	長野県考古学会員
調査員	篠田 徳登	新・宮田村文化財保護委員長
"	吉村 進	明治大学生
"	福沢 正陽	駒ヶ根市博物館主事
"	本田 秀明	長野県考古学会員
"	山田 とし	"
調査補助員	田中 義蔵	宮田村文化財保護委員
"	平沢 茂	"
"	古河原 政治	宮田村教育委員会
"	竹村 美知子	"
手伝い	上川 名昭	日本考古学協会員・玉川大学講師
事務局	加藤 勝美	"
指導	桐原 健	長野県教育委員会指導主事

第3節 発掘作業経過

7月3日(月)曇

北側地区の県営は場整備に伴う古町・田中北遺跡発掘について作業の打合わせを福祉センターにて行なう。

調査団長友野良一、調査委員太田保、山田としの各氏と宮田村文化財保護委員が出席、発掘予定地は、水田休耕地帯であるので、表土はブルドーザーで取りのぞき、その後を発掘する方針をきめた。

7月20日(木)晴 田中北遺跡調査

本日から発掘予定のところ、ブルドーザーが来ないため、現地に集合、器材の搬入、周辺の測量と數ヵ所の試掘を行ない、数片の土器を採集した。午後は篠田徳登宅にて打合せ会を開いた後解散した。

人員 調査員5名 作業員6名 調査補助員2名

7月21日(金)晴 田中北遺跡調査

午前中はブルドーザーが来ず、表面採集などして待機していたが、午後2台来て表土をはねてくれた。

人員 調査員2名、作業員使わず。

7月22日(土)晴 田中北遺跡調査

村道北側線の北側の表土をはねた所から焼石、焼土等遺構が現われた。

人員 調査員 3名 調査補助員 2名 作業員 9名

7月23日(日) 晴ときどき小雨 田中北・古町遺跡調査

駒ヶ根市から吉村進氏応援に来る。田中北の発掘地を中心に平面測量を行ない、午後は古町地区に分かれ、トレンチ 1本を設定、調査にかかる。

人員 調査員 5名 調査補助員 2名 作業員 11名



第7図 田中北遺跡発掘状況

7月24日(月) 曇のち雨 古町遺跡調査

グリッドを設定し、発掘に着手、北方に住居の床面が現われて来た。南北約 5m、東方に拡張していく。資材を運び、本格的に調査を進めようとしているところに雨降りとなり、午後休み。

人員 調査員 2名 調査補助員 2名 作業員 9名。

7月25日(火) 晴 古町遺跡調査

発掘を再開、掘り下げる 25~30cm 位の所から木炭片多数現われてきた。柱穴址 3カ所、陶器片多数出土。

人員 調査員 3名 調査補助員 2名 作業員 12名

8月11日(金) 小雨のち晴 田中北遺跡調査

朝からブルドーザーにて、東側 4カ所位の黒土の除去をする。

人員 調査員 2名、作業員 1名。

8月13日(日) 曇 田中北遺跡調査

表土下を更に 1m 発掘した所から須恵器などを発見した。その他、陶器片を検出。

人員 調査員 2名、作業員 6名。



第8図 古町遺跡発掘状況

8月14日(月) 晴

お盆のため、発掘作業休み。

8月15日(火) 晴 田中北遺跡調査

友野團長ほか 2名にて、地区内の地層調査のため、村道北割線を基準にした高低測量を行なう。

人員 調査員 1名、作業員 2名。

8月17日（木）晴 田中北遺跡調査

友野團長により、一昨日の高低測量の補足をする。

人員 調査員 1名。



第9図 田中北遺跡 昼休み風景

8月23日（水）晴ときどき雷雨、田中北遺跡

調査

本日から玉川大学の上川名 昭氏来援して下さる。田中北の発掘にて土器、石器などを収集、住居址の撮影。

人員 調査員 3名、調査補助員 2名、作業員 8名。

8月24日（木）晴 古町遺跡調査

A 地区の南端にグリッドを設定して調査した。6カ所を 1.5m まで掘って地層の断面を調べる。陶器片を検出。

人員 調査員 2名、調査補助員 1名、作業員 9名。

8月25日（金）晴 古町遺跡調査

B地区を発掘。灰釉陶器の高杯を発見。

人員 調査員 1名、作業員 4名。

8月26日（土）雨 古町遺跡調査

雨のため作業を途中から中止。

人員 調査員 2名、作業員 2名。

8月27日（日）晴 古町遺跡周辺調査

遺跡の断面測量。他の作業員は、古町南の「上光金」の草刈り及びグリッドを設定をする。

人員 調査員 3名、調査補助員 2名、作業員 5名。

8月28日（月）曇 ときどき小雨 古町・田中北遺跡周辺の調査

古町南の「上光金」の発掘、遺構も遺物も発見できなかった。午後になり、田中北の西側をブルドーザーにて整地中、柱穴址を発見、直ちにブルドーザーの作業を中止して、全員の手力により当該柱穴址の発掘を行なう。夕方までに実測を終了した。

人員 調査員 3名、作業員 8名。

8月29日（火）晴 古町・田中北遺跡調査

写真撮影のため、午前5時から田中北の柱穴址に3脚を据え、日の出を待つ。午前6時30分頃撮影を終える。

古町地区は、発掘現場の周辺 500m 間を測量した。

人員 調査員 2名、作業員 2名、事務局員 2名。

8月30日（水）晴 古町遺跡調査

昨日に引き続き周辺の測量を実施。

人員 調査員 1名、作業員 2名。

8月31日（木）晴 古町遺跡調査

作業を中止し、測量及び遺物の整理をする。上川名 昭氏帰京する。

人員 調査員 2名。

10月28日 晴 古町遺跡調査

発掘予定地に排水溝の盛土をされたので、新たにB地区にグリッドを設定調査。

人員 調査員 1名、作業員 7名。

10月29日 晴 古町遺跡調査

土砂に埋められた古町第1号住居址を友野団長、再確認の必要から発掘。午後になり住居の床面を発見する。

一方、深さ 2m の排水溝の断面の測量を行なう。作業終って中越北ノ城上方の畠地の発掘点を見にいく。平安期と思われる土器が出ていた。

人員 調査員 1名、作業員 6名。

12月10日（日）晴 古町遺跡調査

以前に掘り下げた住居址の床面を拡張してみる。木炭片はときどき現われたが、最終的には住居址全体の再調査はできなかったのは残念であった。これにて全作業終了。

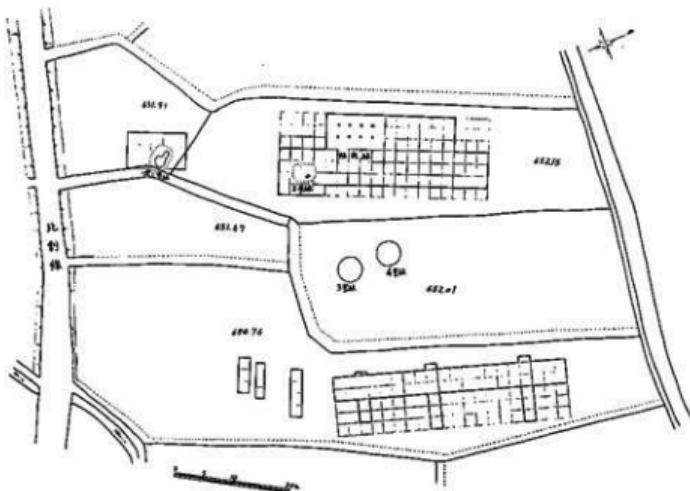
人員 調査員 1名、作業員 3名

（様 田 德 登）

第Ⅲ章 遺構

第1節 1) 田中北第1号址

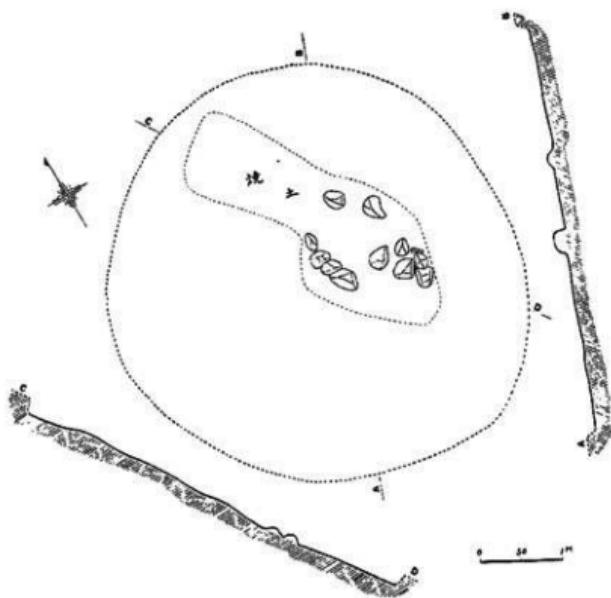
本遺構は水田工事のとき破壊が甚しく辛うじて黒色土の落込みを認める程である。東西 5.05m,



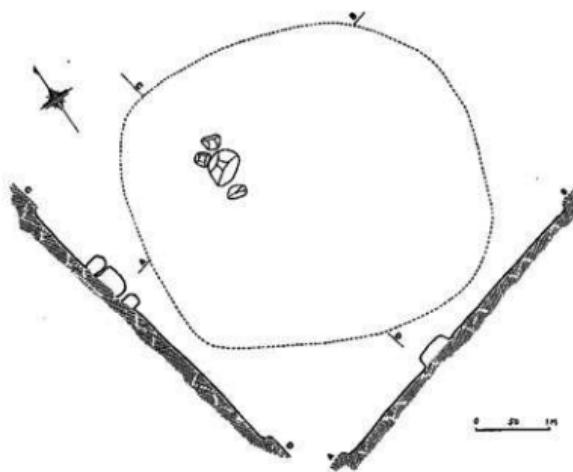
第10図 田中北遺跡遺構配置図

南北 5.15m, 楼円形の遺構である。壁の高さ 15~18cm を測るが上部は切り取られたものである。壁面は砂礫で、壁には何の施設も認められなかった。床面は砂礫上に赤土を敷き叩かれたもの。床面は南東に傾斜している。柱穴らしきものは発見できなかった。焼土は中央やや東寄りに幅 1m 長さ 3.5m 厚さ 5~20cm の範囲にわたって焼けている。相当長い期間にわたって焼かれたものらしい。焼石頭の大花崗石が南側 6 個、北側に 4 個、東側に 2 個配されているが、炉址とは一寸考えられない配置を示す。遺物は出土しなかったので時代は不明。

2) 田中北第2号址、本址は、第1号址の北グリッド 10~12 区に発見されたものである。第1号址と同様、砂礫層に掘り込まれた址で、壁は判然としない個所も見受けられた。プランは小判形、東西 4.7m 南北 4.3m、床面は砂礫、一部に非常に堅く叩かれた個所が認められたが全体としてはざらざらであった。床面内にはピットも柱穴も発見できなかった。中央やや西寄りに 50×40cm 高さ 30cm で上面が磨かれた花崗岩の平盤石が発見された、その平盤石を囲むように、25×20cm 高さ 18cm と 26×21×19cm の上面平らな花崗岩石が 3 個配されていた。これらの配石は上面がいづれも磨かれ使



第 11 図 田中北遺跡第 1 号址実測図



第 12 図 田中北遺跡第 2 号址実測図

用されている。本址出土遺物は、包含層中から、土師、須恵器、床面からは灰釉陶器が発見された。

(吉村 進)

3) 田中北第3号址。本址は、柱穴址の東20cmの位置に発見されたものであるが、本址も1号・2号址同様殆んど破壊され、黒色土層の落込みが僅かに認められる程度で、そのプランは4m、ほぼ円形である。遺物は発見できなかった。

4) 田中北第4号址。本址は、第2号址の北3.2mの位置に発見された址であるが、3号址同様僅かにプランを認める程度で調査はできなかった。3mの円形で、遺物は発見されなかった。

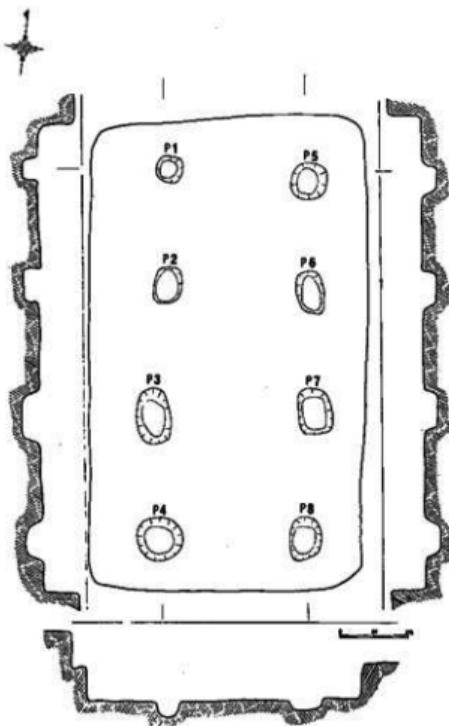
(友野 良一)

5) 田中北遺跡発の柱穴址

本柱穴址は、ブルトーザーによって、表土を削り平らにしている時に発見されたものである。平面形は実測図に示す如く、南北に4個の柱穴址が2列に発見され、柱穴の径のわりに深さがないのはブルトーザーによって削りとられてしまったからである。

柱穴址は、円形あるいは長方形の比較的大型のもので、正方形の柱穴址が3箇並んだ状態で配置されている。東西P1～P5までの柱穴址の中心距離は2m、南北のP1～P4の距離は5.3mを数える。

P1は径40cm深さ25cm、P2は長方形をなし、長径53cm、短径42cm、深さ27cm、P3も長方形で長径85cm、短径50cm、深さ27cm。P4は径65cmの円穴で深さ25cm。P5も円穴で径53



第13図 田中北遺跡柱穴址

柱穴址番号	形 状	径 cm	深さ cm
P 1	円 形	40	25
P 2	長方形	長径53 短径42	27
P 3	長方形	長径85 短径50	27
P 4	円 形	65	25
P 5	円 形	53	24
P 6	長方形	長径57 短径42	22
P 7	長方形	長径70 短径50	20
P 8	長方形	長径65 短径46	22

cm. 深さ 24 cm P6 は長方形をなし、長径 57 cm. 短径 42 cm. 深さ 22 cm. P7 も長方形で長径 70 cm. 短径 50 cm 深さ 20 cm. P8 も長方形で長径 65 cm. 短径 46 cm. 深さ 22 cm を数える。

P1 から P2 までの中心距離は 1m 70 cm. P2~P3 は 1m 80 cm. P3~P4 は 1m 84 cm. P1~P5 は 2 m. P2~P6 は 2 m 8 cm. P3~P7 は 2 m 20 cm. P4~P8 は 2 m 10 cm. P5~P6 の南北の中心距離は 1 m 60 cm. P6~P7 は 1 m 75 cm. P7~P8 は 1 m 85 cm を算する。

以上の如く東西に 2 m から 2 m 20 cm. 南北は 1 m 60 cm から 1 m 85 cm の中心距離をもって柱穴址が配置され、P1~P4 までの距離は 5 m 30 cm を数え南北に長方形をもってつくられている。一見すると整然と配置されている柱穴址も実測図で見ると柱の中心線の出入りが多くその数値が区々で頗る乱暴で粗末なつくりと言わねばならない。また、柱穴址は正方形に配置された 3 箇が南北につなげられたもので、その建築のあり方は正倉院の校倉造りに近い形状をもっていることは興味ある点である。P2 からは土師質の土器片が出土しており、小破片のため時期判定は困難であるが、鎌倉時代に属するものではなかろうか。また、柱穴址の形状が方形を呈していることによっても時代が降るものと推定出来る。いずれにせよ、専門の建築学者の協力を得なければ、素人の筆者にとってはこれ以上の推定は出来かねるものである。

参考までに同類の柱穴址を挙げて報告を終りとする。

大学院時代に 3 箇の柱穴址を掘り上げた平出遺跡^{注1}、そのほかに常陸國新治郡衛址^{注2}、甲斐日下部八日市場^{注3}、同郷八幡村八反田^{注4}、その外全国的にはもっと数多く見られるが、今回はこの程度にとどめておく。

(上川名 昭)

注 1 信濃第4卷第2号平出遺跡発掘特集号。

2 高井悌三郎 常陸國新治郡上代遺跡の研究。

3 大場磐雄 甲斐國日下部町発見の住居址。信濃 2 / 4。

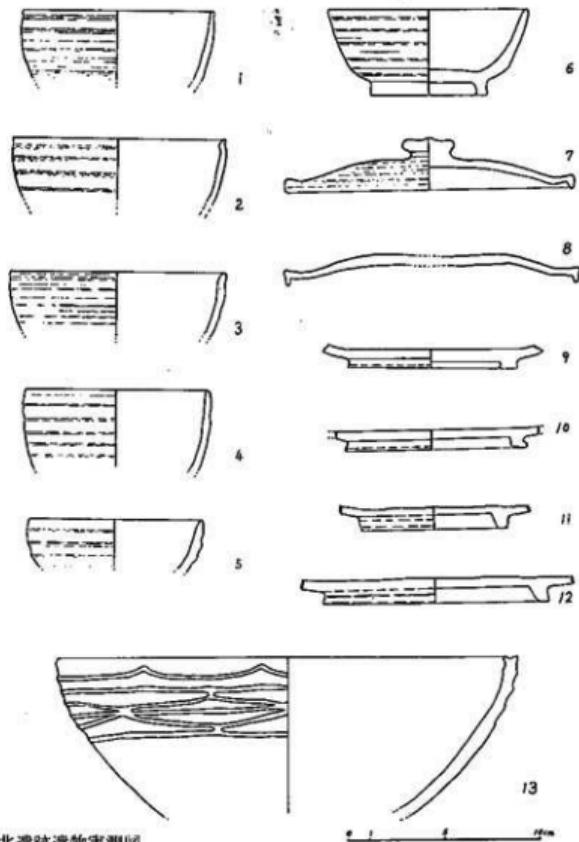
4 小出義治 地底の古代社会 月刊山梨。

第2節 1) 古町第1号住居址 第15図・16図 口絵

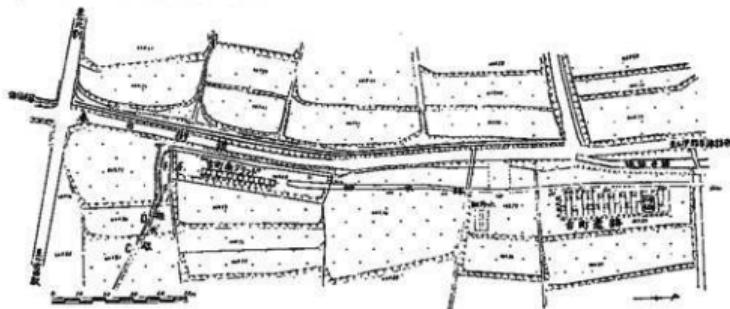
本住居址は、東西壁の長さ 3.7 m. 南北壁の長さ 3.6 m 隅丸方形の住居址である。過去の水田造成工事のため耕土と地場との一部が破壊されているので、壁の高さは全く計測できないが、現在の高さは、断面 A では 22 cm. · B. 28 cm. · C. 31 cm. カマドの個所では 50 cm である。壁の状態は、砂礫層中に設けられているため、面が不安定で何の施設も認めることができなかった。壁の傾斜は平均 10 度 30 分外側に開く。

床 面 床面は砂礫層中に設けられているため、赤土を幾分置土した程度で、それも全体的に置かれているのではなく、まばらに発見された、置土の厚さは 1~2 cm 程度。

柱 穴 p.1 · p.2 · p.3 の主柱穴は発見されたが、他の柱穴は発見されなかった。このような柱穴の不足する例は、駒ヶ根市赤穂養命酒駒ヶ根工場内遺跡発見の土師式住居址に、また、他の多くの遺跡にも例を見る。宮坂英式氏は、自然立木を利用したのではないかという説明をしている。柱穴の径は、P.1. 20×21 深さ 18 cm. · P.2. 13×15 深さ 20 cm. · P.3. 20×23 cm. · P.4. 22×18 深さ 30 cm. ·



第14図 田中北遺跡遺物実測図



第15図 古河遺跡地形図及び遺構分布図

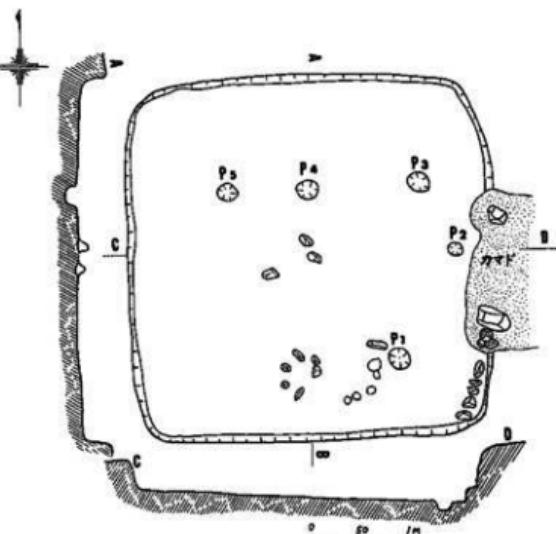
P.5.22×17 深さ 18cm 柱穴の底はほぼ平面である。P.1 と P.2 は東側の柱穴と考えられる、P.1 と P.3 との位置は、P.3 がやや東寄りにズレている。

その開角度は 8 度 30 分を測る、こうした例は掘立式建築にはしばしば見受けられるところである。柱間は、1.73m、やや小規模の建物である。P.3、P.4、P.5 は直列に東西に並び壁とは並行である。最初は P.3 と P.5 で桁を支えていたのが、その後 P.4 を補強に入れたのかも知れない。P.3 と P.5 との柱間は柱の芯から芯まで 1.9m で南北の柱間より幾分長い、壁から柱までの間隔は平均 70~80 cm である。「カマド」の位置は東側ほぼ中ほどに設けられたもので、自然石を芯に組み粘土で固めた「カマド」である。「カマド」の幅は 1.2m を測り得たが東西の長さは水田造成工事のため、破壊され知ることができなかつた。また、上部も同様破壊され調査ができなかつた。煙道は、東側に 50cm は掘り得たがその外方の長さは不明で、内部はよく焼けた土が充満していた。遺物としては床面から、大平鉢（南北朝）、灰釉おろし皿（南北朝）青磁（南宋）等が検出された。

（吉村 進・友野良一）

2) 古町 A 地区の調査

古町遺跡の面積は、12,000m² にわたる広さであるが、過去の水田造成前の基盤面が東に 3 度 30 分の、傾斜地に水田を造成したことにより、切土と盛土の比高が平均 20m 行く毎に 90m になる関係上、現在の状態における調査の可能範囲は、5 分の 1 程度がせいぜいである。従って、今回の調査は 240m² の面積にとどまってしまった。古町第 1 号住居址は幸運にして破壊を免がれたものである。その他は、一部に壁と思われる箇所、焼土のみのところ、木炭焼石等が発見されたが、造構と断定するまではいたらなかつた。しかし、包含層中から



第 16 図 古町遺跡第 1 号住居址

は土師、灰釉平碗（室町）、大平鉢（南北朝）、灰釉印花紋小壺（鎌倉）天目茶碗（南北朝）灰釉印花紋（鎌倉）灰釉深皿（室町前葉）灰釉皿桃山等平安以降鎌倉・室町・南北朝・桃山時代にわたる多くの遺物が発見された。

（友野良一）

3) 古町B地区グリッド

古町A地区から発見された住居址の調査をする予定であったが、同地区の上部には水田区画整理工事によって多量の土砂が積み重ねられてしまい、発掘が不能となってしまった。よって急ぎ予定を変更し、A地区に隣接せる南側にまだブルトーザーの牙から残されていた箇所を見つけてB地区とし、 $2m^2$ のグリッドを設定して調査を開始することにした。

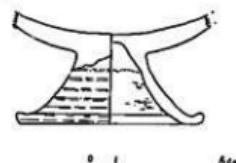


第17図 古町遺跡第1号住居址出土・遺物実測図(口径 24cm)

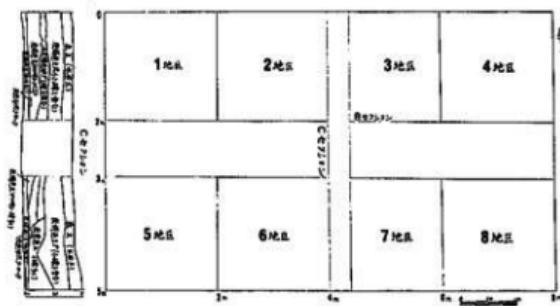
B地区グリッドは、中央部に東西は幅1m、南北は幅40cmの十字形のセクションベルトを取り、 $2m^2$ のボックスを1~8区に分けて発掘を行なった。

セクション図に見られる如く、第I層は水田面で厚さ約25cm、第II層は灰褐色をなす水田を作った時に平坦

に保つためと水漏れを防ぐために設けられた。地場と呼ばれる小石混りの層が厚い所で30cm薄い箇所で10cmほど堆積している。第III層は1区、2区では灰褐色の小礫を含む層が約20cmほど堆積し、3区、4区では砂質を含む層となって続いている。第IV層は1区では灰褐色砂層が斜めに入り、2区~4区では平坦に堆積し、さらに2区~4区ではこの灰褐色砂層の上に黒褐色砂層が堆積しており、第V層をつくっている。言葉を換えれば、1区では第IV層であるが、2区~4区では第V層となっている複雑な堆積状態を示している。第V層は1区では黒褐色の小礫を含む層が斜めに入り、その下に第VI層として粘性のある黒褐色土層となって1区では厚く、2区、3区の部では薄く堆積し、途中でこの層は消えている。このセクション図は、中央の東西セクションベルトの北側のもので、5区



第18図 古町遺跡Bグリッド6区出土遺物



第20図 田中北遺跡出土石器実測図

第19図 古町B地区グリッド実測図

～8区のセクションは必ずしも同様な状態ではなく非常に複雑な堆積状態を示している。遺物は、第Ⅱ層即ち地場と呼ばれる層と、その下の第Ⅲ層から灰釉、自然釉のかかった陶磁器片、鐵釉片が見られ、他の層からは遺物の出土は見られなかった。

遺物は2区と6区に比較的多く見られ、他の区からは殆んど発見されなかつた。

2区の第Ⅲ層（地場）からは鐵釉の破片が見られ、第V層からは肉の厚い土師質の破片が一片見られ、内面は火にあたったためか剥離が著しい。6区の第I層から天目茶碗の底部破片が採集され、第Ⅲ層からは灰釉高杯が出土し、坯部は淡緑色の釉がかけられ、内面には鉱物質の吹き出しが著しい、脚部は下部の広がったものでクロロ痕がきれいに残されている。また、同層から鐵釉の碗、常滑の壺の破片が見られた。鐵釉の碗は小破片で、常滑の壺は灰色をなし、器肉は部厚く自然釉が淡緑色に吹き出している。このほか大平鉢の小破片が見られた。

B地区グリッドの層序及び出土遺物は以上の如くであるが、層序の複雑な点出土した遺物もその発見された状態から見て、流れ込んだものと考えることが出来る。扇状地における層序を明確にすることは、非常に困難なことであり、特にこの扇状地においても、洪水による流出のあったことが伝えられていることと考え合せば一度や二度の洪水ではなく、歴史時代に入りても頻繁に扇状地を荒した自然現象がくりかえされていたことは層序の複雑なことによても、うなづけることである。よって発見された遺物は、B地区より山麓よりの西側の扇頂部近くにあった遺跡から流れ込んだものと考えることが出来る。遺物については、小破片で明確に断定することはさけねばならぬかもしれぬが、2区の第V層から発見された、土師質の破片から考えて、どうも平安までさかのぼるものではなく鎌倉時代にまで下ったものと考えられる。その他の遺物も鎌倉以後南北朝から桃山ぐらいまで降る歴史時代の遺物と考えることが出来る。遺物は橋崎彰一氏の鑑定によるものである。古町遺跡の実態が明らかにされたならば、わが国の歴史考古学における一大エポックをなすものと確信するものである。また東山道の宮田駅址に推定されていた地区的調査であったが、この調査においては駅に關係ある造構も遺物も発見出来なかつたことは誠に残念なことであった。

(上川名 昭)

第Ⅳ章 遺 物

第1節 田中北遺跡の遺物

田中北及び古町遺跡の調査から、縄文時代最末期の縄文晚期土器と、9世紀に焼成した須恵器、土師器と、古瀬戸や美濃などの窯元の陶器が出土した。

挿図第14図-13は縄文晚期土器で、東北地方に栄えた亀ヶ岡文化の影響を強く受けた土器である。

田中北遺跡の柱穴址南側から、口径約24cm 器厚6mm の浅鉢形土器一個体出土した。

口縁部が内湾し盤（鉢）に類する形の土器で、胎土は良質な粘土を使い、丁寧な整作で器壁の両面を窓で研磨している。文様は、細隆起線と壁面を削磨して表現した工字文を組合せて文様帯を形成させ、この主文様帯を平らな口縁部に平行して幅広な沈線によって区割する。この幅広沈線は口縁部に8個の山形にセリ上げてつまみ状突起文を作っている。細隆起文と工字文は6組で器台を一周成形している。

この縄文時代晚期の遺跡は、上伊那郡下では、駒ヶ根市赤穂如来寺・同船山・伊那市西春近安岡城・箕輪町箕輪遺跡・長谷村黒河内和泉原等出土例は非常に僅小で、縄文時代晚期を知る貴重な資料である。

1) 田中北2号址の遺物、挿図第14図1~12（口絵も参照されたい。以下同じ。）

田中北2号址から須恵器と土師器が多数出土した。挿図第14図1~5、7~12の須恵器は、青色・暗灰色・黒茶色などの色調で胎土は砂粒を多く含み、纏織痕が強く残る、焼成悪い环・台付皿・蓋などおそらく伊那地方の窯で焼成したものとみられる。また、挿図第14図、6のように良質な粘土を使い、整った成形高温度で焼成した台付深鉢も出土している。

この田中北遺跡の遺物は9世紀に使われた遺物である。

第2節 古町遺跡の遺物

2) 古町1号住居址とその付近の遺物

口絵の中国竜泉・古瀬戸・中津川・美濃・常滑の部に示すとおりである。とくに口絵36番は中國南宋時代龍泉で焼成した青磁碗。口絵26・30・35番と挿図第17図は中津川で焼成した口径24cm、纏織痕が細かな大平鉢である。口絵32番、挿図第18図の灰釉高环、口絵27番の灰釉印花文瓶子、口絵41番の灰釉印花文小壺、口絵15、43番の天目茶碗など優れた陶器があり、細かい破片であるが鎌倉末から桃山時代に常滑・古瀬戸・中津川・美濃の窯で焼成した陶器が多数出土した。

これらの陶器については古窯元を研究されている名古屋大学助教授樋崎彰一氏に御教示をいただきて脱稿したものである。

(太田 保)

第Ⅴ章 ま と め

は場整備工事と併行した中で行なわれた緊急発掘であったので、あるいどの領約は免がれなかったが、南信土地改良事務所及び宮田村役場は場整備係の協力により、調査が実施でき得た。古町・田中北河遺跡調査の状況は前述のとおりであるが、極めて広い遺跡であるため、その後の整理と研究は、相当長時間を必要とするし、付近に開通性のある遺跡も多く引続いて調査が行なわれる状況にあるので、ここでは、発掘調査の過程において把握し得た問題点を記して、今後の研究と保存活用の参考に資したい。

今回は場整備は、重要な「東山道」の宮田駅址の破壊につながるものであるところから、宮田村文化財保護委員会は、再三にわたって審議を重ねた結果、宮田駅址は、柏木・古町・木戸口・細室屋平・諏訪形・中越等いくつかの説がでているが、決定的な決め手がないところから、調査のあり方は結果を急がず一つ一つ候補地を丹念に調査することで意見の一致を見た。

今日まで伊那谷における駅址の研究は、下伊那郡史発刊を契機として、昭和32年以来研究が続けられ先學により、一応の落着は見せた感があるが、発掘による駅址の調査は、全国的に見ても数少い現状であるので、調査に注意して実施した。

田中北遺跡、本遺跡の規模と立地についてであるが、地形の項で述べたように、大田切原状地と長坂原状地の複合した面に當まれた遺跡で、遺跡の面積は南北150m、東西100m、調査面積1500m²である。調査された遺構は時期不明であるが4箇の堅穴址と、土師の柱穴址である。そのほかの遺構は発見されなかつた。本遺跡から発見の遺物は、織中期・織文晩期・土師後期須恵・灰釉が出土した。

古町遺跡、本遺跡は宮田駅址の有力候補の一つである。今回の調査では住居址1箇（南北朝）を発見した、現在伊那地方で調査されている住居址で、この期の住居址は初見である。その他、燒土數箇所が発見されたが遺構にはつながらなかつたのは惜むべきであった。A地区の調査面積は東西8m南北36mの限られた面積以外は、調査不可能であったのは返す返すも残念であった。A地区出土の遺物1号住居址からは青磁碗、龍泉、南北朝、大平鉢、南北朝、中津川。壺、錫倉、等で中国の優品龍泉をはじめ南北朝の遺物が出土し、本住居址の時期を明らかにした。そのほか、大平鉢南北朝、中津川。天目茶碗、古瀬戸、南北朝。室町期では、灰釉平碗、古瀬戸、室町初期。灰釉深皿、古瀬戸、室町初期。錫倉期、灰釉印文瓶子、古瀬戸。灰釉印花文小壺、古瀬戸。9世紀代、須恵器灰瀬戸等が出土した。このことにより、錫倉・室町・南北朝期にいたる遺跡であることを確認し得た。東山道の駅址は錫倉初期には存したはずである。従って東山道宮田駅址の存した時代末から南北朝時代に栄えた遺跡ということができる。B地区グリッドの調査は上川名・昭氏によって調査されたものである。表土からは天目茶碗、古瀬戸、室町初期。地場層（表土の下の層）鐵軸香炉、古瀬戸、錫倉末。壺、地元のカマ、錫倉。第Ⅲ層（地場の下40cm砂礫層）鐵軸の碗、美濃、桃山。カマ。常滑、南北朝。灰釉高杯、古瀬戸、錫倉末。以上が主なる出土遺物であるが、B地区はA地区より一段底い箇所で、しかも上流からの流水によって堆積したことが明らかな地区であるので、明確に層位による分類は不可能と考えられるが、とにかくこれより上流部にこの期の遺跡が存することは明らかとなつた。今後の研究に興味がもたられる。古町南遺跡にグリッドを設定して調査したが、遺構遺物は出土しなかつた。今回の調査の重要なテーマであった宮田駅址に直接該当する遺構は発見出来なかつたが、今までに或いは破壊されたのかも知れないし、または、諏訪形井筋の上にも、遺物が散布しているので、今後の調査に期待をかけたい。

本調査に当っては調査員の不足により、駒ヶ根博物館学芸員、福沢正陽氏、明治大学生吉村進氏の応援、特に玉川大学上川名昭氏には暑さ酷しき折 10 日間に亘る熱心な調査により、柱穴址の発見、B 地区の層位的調査の成果等今回の調査のポイントになる調査をされたことを紙上をおかりし厚くお礼申上げる次第である。また遺物については、名古屋大学権崎先生の分類によった。一志茂樹先生には、宮田駅址の調査の基本的態度について御指導を賜わり、また、地元向山雅重・篠田徳登両先生には特別の御指導をいただいた。そのほか宮田村文化財保護委員の各位、地元の皆様には過分の御支援を賜わったことを厚くお礼申上げる次第である。

(友野良一)

- 注 1. 一志茂樹 わが國中部山地上代交通の一性格 信第 5 卷第 2 号 昭和 28 年
2. 宮下 操 平安宮田駅址踏査記 伊那路 1—3 昭和 32 年
3. 篠田徳登 宮田駅址の私考 伊那路 1—3 昭和 32 年
4. 市村威人 下伊那郡史 第 4 卷 昭和 36 年
5. 大場鬱雄 神坂伸 神坂峠祭祀遺跡発掘調査報告書 昭和 46 年
6. 長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書宮田村 長野県教育委員会、日本道路公団名古屋支社 昭和 46 年
7. 長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書阿智村 長野県教育委員会、日本道路公団名古屋支社 昭和 46 年

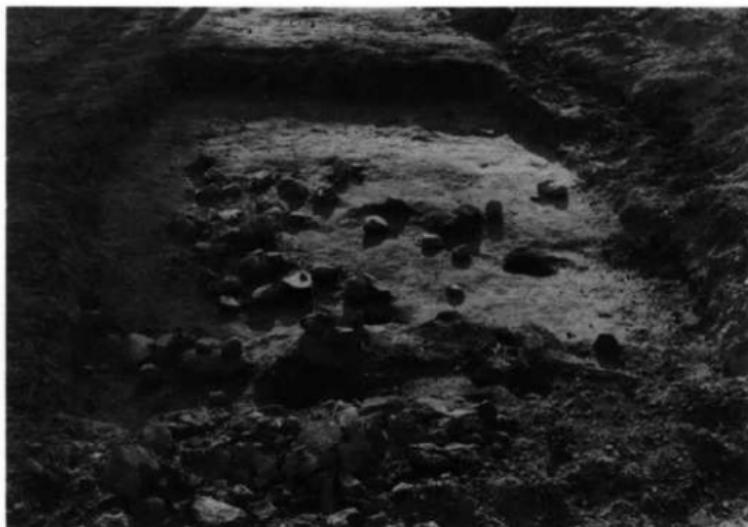
以上



図版 第1 古町・田中北・木戸口遺跡の全景



図版 第2 古町遺跡第1号住居址の東断面地層図



図版 第3 古町遺跡第1号住居址の遺構



図版 第4 田中北遺跡遺構配置図



図版 第5 田中北遺跡第1号住居址の遺構



国版 第6 田中北遺跡第2号住居址の遺構



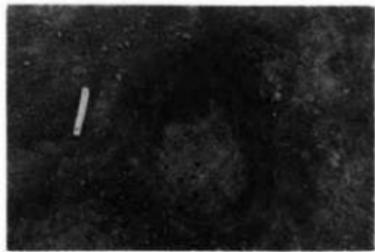
国版 第7 田中北遺跡柱穴址



図版 第8 田中北遺跡トレンチ



図版 第9 田中北遺跡第2号址遺構



図版 第10 田中北遺跡柱穴址の遺構



図版 第11 田中北遺跡出土遺物
(石器・挿図第20図のもの。)



図版 第12 田中北遺跡第3トレンチ出土の土師器



図版 第13 全昌寺(昭和46年移改築・
鎌倉期の薬師如来を納める。)



古町・田中北遺跡緊急発掘調査報告書

昭和48年3月20日 印刷

昭和48年3月30日 発行

長野県上伊那郡宮田村
発行所 宮田村教育委員会

長野県岡谷市川岸108番地
印刷所 中央刷印株式会社

〔非売品〕

